図書紹介

『ジェンダー研究を継承する』

（佐藤文香・伊藤るり編、人文書院、2017年）

中村　江里
一橋大学大学院社会学研究科特任講師

本書は、一橋大学大学院社会学研究科の先端課題研究「ジェンダー研究の過去・現在・未来―女性学・ジェンダー研究のパイオニアに対する聞き取り調査を中心に」（2014年～2016年）の成果を書籍化したものである。日本の大学で女性学が初めて開講された1974年以来、約40年の歳月の中で、社会科学の諸分野ではジェンダー・セクシュアリティの視点を取り入れた研究が蓄積されてきた。本書では、こうしたジェンダー研究の場を切り拓いてきた世代（おおむね1930～40年代生まれ）を、現在大学院で学ぶ後続の世代にとっての先駆者という意味で「パイオニア」と位置づけている。

本書は3部構成であり、女性学・男性学・ジェンダー研究の創出に関わる第1部（原ひろ子／井上輝子／金井淑子／上野千鶴子／江原由美子／伊藤公雄／木本喜美子／勝方＝稲福恵子／鄭暎惠）、女性史の新たな展開とジェンダー史・男性史の登場に関わる第2部（もろさわようこ／伊藤康子／加納実紀代／西川祐子／有賀夏紀／荻野美穂／宮城晴美／金富子／坂元ひろ子／鹿野政直）、セクソロジーの研究と実践に関わる第3部（池上千寿子／村瀬幸浩）からなる。各章では、21名の多様なライフストーリーを通じてジェンダー研究がこれまで歩んできた歴史が浮かび上がり、章末のインタビュアーの所感では、「パイオニア世代」との対話から今後ジェンダー研究を批判的に継承していくための課題や展望が述べられている。

インタビュアーの一人として本プロジェクトに参加した筆者にとっても、「パイオニア」世代との対話は実りの多いものであった。個別具体的な語りの中に、アカデミアにおけるジェンダー研究の承認の問題、フェミニズムに対するバックラッシュ、教育面での学生との関わり、結婚・出産と研究の両立、家族との確執など、若手のジェンダー研究者が現在でも直面するような問題がそれぞれの言葉で語られている。今後も何かの壁に直面した時に、様々な知恵やヒントを得られるような本になるのではないか思う。

また、歴史学を専攻している筆者にとって、第2部で自分の専攻分野の「パイオニア」世代が格闘してきた歴史を深く知る機会を得られたのはもちろんのこと、第1部、第3部では、人類学・哲学・文学・社会学・セクソロジーなど他のディシプリンにおけるジェンダー研究の固有の歴史や歴史学との共通の課題が共有できたことも大きな収穫であった。

さらに本書では、階級、人種・エスニシティ、セクシュアリティなどジェンダー以外の変数を取り入れた交差性（インターセクショナリティ）の観点が、ジェンダーの権力作用の重層性を理解する上でいかに重要かが様々なところで指摘されている。編者の伊藤の言葉では、本書は「自分の研究関心を横に開き、異なる分析視角、異なるディシプリンの者と共有していく」ようなジェンダー研究を目指す試みでもある。参加者の専門や問題関心には限界とバイアスもあるが、ぜひ様々な研究分野の方々に読んでいただき、今後更にジェンダー研究の輪が広がっていくことを願っている。